

第1回 オリエンテーション

(1) プログラム

日 時 | 5月12日(日) 10:00 ~ 12:00

会 場 | 江東区役所7階 第71~73会議室

内 容 | オリエンテーション

- ・今年度の趣旨説明をしました。
- ・「ユニバーサルデザインまちづくりってなんだろう？」と題して、アドバイザーの川内さんからお話をいただきました。

タイムテーブル |

10:00 (10分) あいさつ

10:10 (40分) 今年度の進め方、これまでの取り組み

10:50 (10分) ~休 憩~

11:00 (60分) **【お話】**「ユニバーサルデザインまちづくりってなんだろう？」

アドバイザー 川内美彦さん

12:00 終了

(2) お話「ユニバーサルデザインまちづくりってなんだろう？」

ユニバーサルデザインアドバイザー 川内美彦

1) なぜ障害者は「困りごと」が多いのか

- ・「障害のある人は困り事が多いので手助けしましょう」と言われることがありますが、障害のある人はどうして困り事が多いのでしょうか。
- ・例えば、「移動」について考えてみます。車いす使用者は階段があると移動できませんが、歩ける人にとっては問題ありません。「読む」について考えると、大多数の人は目で読みますが、視覚障害のある人は指先で読んだり、データを耳で聞いたりします。「話す」について考えると、大多数の人は声で喋りますが、聴覚障害のある人は手話で話したりします。
- ・何かをする時に人により「やり方」が違うのですが、実際にまちに出てみるとどんなことが起きているのでしょうか。視覚障害のある人が街角の書店にふらりと入って「点字の本」を買えるでしょうか。聴覚障害のある人が映画を見る時、邦画よりも洋画を好むと言われていますが、どうしてでしょうか。車いす使用者は、行きたい店より行ける店になりがちなのは、どうしてでしょうか。
- ・障害のある人は「できない人」と思われることがありますが、実は多くのことができています。ただし、そのやり方が大多数の人とは違うのです。そのことを社会が今まで受け入れてこなかったの、いろいろと困り事が起きているのです。

2) 「人によりやり方が違う」を認める社会 = 《障害の社会モデル》

- ・今の社会は、多数派のやり方に合わせて作られています。多数派と違うやり方の人に対して、これまでは「使えないあなたが悪い、使えるように社会に合わせる訓練やりハビリをしなさい」と言われてきました。これを《障害の医学モデル》と言います。一方、「障害のある人の暮らしづらさは、自分に合ったやり方ができない社会環境になっていることから生まれている」と考えるのが、《障害の社会モデル》です。
- ・問題は、多数派とは違うやり方の人がいるということを社会が知らないし、その違うやり方を社会が受け入れてくれないところにあります。

3) 「差別」をなくし、「尊厳」を尊重するための、 だれもが使える整備

- ・再び階段で考えます。車いす使用者は階段が使えません。しかし多くの人は階段を使って2階に行きま

す。つまり階段は、行ける人と行けない人を分ける、《差別》を生む装置になっています。点字の本を扱っていない本屋さんは、結果的に差別を生じてしまっています。字幕のない映画は、結果的にセリフを音声で聞くことができない人に鑑賞ができない状況を生み出しています。誰も差別してやろうなんて思っていないけれども、そうなっているのです。

- ・なぜ差別はいけないのでしょうか。それは、差別された側が傷つくからです。みんなが自由に最新の本を買えるのに、自分だけが買えない。みんなが楽しめる映画を、自分だけが楽しめない。みんなが行ける店に、自分だけが行けない。自分だけが阻害されること、取り残されることへの屈辱感があります。差別によって人としての尊厳を傷つけられます。

- ・つまり、だれもが使える整備というのは、差別を生まないため、人の尊厳を尊重するため、平等な社会参加を作り出すために必要なのです。

- ・エレベーターは、階段で生まれた差別をなくす装置であると共に、尊厳を傷つけない装置でもあります。みんなは正面から階段で入って車いすの人だけ裏口からまわるような整備はよくないということです。

4) 「実質的な平等」

- ・国連の障害者権利条約の中には、《他の者との平等》という言葉があります。例えば、背の高い人、中位な人、低い人がいて、塀の向こうを見ようとしています。背の高い人は塀の向こうが見えますが、中位な人と低い人は見えません。平等には2つの考え方があり、1つは《形式的な平等》で、みんなに同じ高さの踏み台を渡します。しかしこれでは、中位の人は見えるようになって、相変わらず低い人は見えない状況が起こります。もう1つの考え方は《実質的な平等》で、背の低い人には塀の向こうが見える高い踏み台を、中位の人には中位の高さの踏み台を渡します。これによって、みんなが塀の向こうを見ることができるという考え方です。

5) 一人一人のやり方の違いに合わせて「目的達成」=ユニバーサルデザイン

- ・一人一人のやり方の違いを受け入れて、その人が目的を達成できるように考えることが大切です。「目的は同じ、やり方が違う」が、《ユニバーサルデザインまちづくり》の基本の考え方です。

(3) 質疑応答

Q UDについて理解が進んだが、UDについては、取り組んでいるようでやってないと感じている。2020年東京オリンピックのポスターが、色覚障害のある私にとって見づらかったので、大会事務局に問い合わせをしたが返事をもらえなかった。東京オリンピックではUDに取り組んでいるとのことだったので、何らかの回答があってもいいかと思ったが残念。今の環境も、自分のことが含まれていないのかなと思うことがある。

A/ 川内 UDはまだイベントになっている。新しい整備がされる際、作る部署は一生懸命に取り組んでいるが、ポスターを作る部署は別でUDの理解が進んでいないことがある。つまりまだUDが世の中の常識になっていない。常識になったら「UD」という言葉は必要なくなる。まだまだ浸透していないが、少数派の人が言わない限り伝わらない。返事はなかったとしても、「このポスターは私には見づらい」と伝えたことはとても重要。少数派が多数派に合わせる必要はなく、少数派の私だからこそ言えることだと思って言い続けることが大事。

Q UDには整備が必要で、結局お金がかかると思った。

A/ 川内 ある大学で、車いすを使う人は少ししかいないのに、その人のために高額なエレベーターをつけるのは余分な投資ではないかという話があったことがある。もし私がビルのオーナーで、私はエレベーターしか必要ないので階段を作らないと言ったとす

る。しかし、階段のない建物は大量の人が使うには不便なことも多く、一般的には受け入れられないのではない。それと同じくこれまで作ってきた建物を考えると、車いすの人のことは考えないで作られてきた欠陥のある建物と言える。欠陥品を正そうとする時にお金がかかるということだと思う。世の中の考え方が変わっていくには、時間がかかる。UDを考えるのが当たり前という状況になっていないことが問題だと思っている。

Q UDの考え方はいろいろあると思うが、障害のある一人一人が社会で活躍できると良い。いろいろな気づきをみんなと共有していきたい。

A/ 川内 砂漠に水をまくようなことをしていると思っていても、少しずつ変わっていくと思っている。地域ごとに取り組んでいたことが、国全体の設計ガイドラインに反映されることもある。

Q UDは、障害者の話だけではなく、外国の方、子育て中の方、高齢者のことなども入ってくると思っている。

A/ 事務局 障害者だけを対象にしているのではなく、だれにでも苦手なことや不便に感じていることがあり、そうしたことも含めて取り組んでいる。これまでも、和食の食べ方と韓国式の食べ方の違いについて体験し、自分と違うからといっていきなり相手が間違っていると思うのは違うことを学んだ。そういう視点からもUDを考えてきている。

